

## 大学放浪記 (35)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、再生可能エネルギー学部近くのレストランについて記す。再生可能エネルギー学部は新しく新設された学部であり、大学本部があるメインキャンパスから6キロ離れた所に位置する。周囲には農場が拡がり、米国の中西部を思い起こすカウボーイがマエジョ大学のシンボルである。またその隣にアニマルサイエンス学部 (School of Animal Science & Technology) がある。新設された学部であることから、殆どの設備や建物は新しく、宿舎もあるが宿泊者はいない。筆者も当初はそこに移り済む予定であったが、一人ではいささか寂しさもあり、また何かあったときのセキュリティなどを考えるとしばし考え直してみるべく気変わりがして未だに移っていない。加えて学部内に食堂が無いので、朝昼晩の食事にも不便である。自転車で最寄りのレストランに出向かねばならない。自転車で10分ほどの位置に2, 3軒の食堂がある。うどん専用の店や米を中心とした店、またそのほかに雑貨物を販売しているスーパーやコンビニに類する店もあるがいずれも自転車で10分ほどはかかる。では学生や職員、教員はどうしているかと言うと同じようにそうした食堂に出向いている。一時は注文をしてデリバリーして貰うことも考えて、最初はその様にしたが、配達料金が加算され、直接食べに出かける場合の5割増しになる(レストランで食すれば30パーツ、配達配達してもらうと45パーツとなる。時には一日中オフィスでの仕事で出歩かないため、体も鈍り気味で運動の必要性も感じていた。そこで積極的にレストラン(食堂)に出向いて食するべく生活を変えた。短距離とはいえ適度な運動に成り、健康にも良いと考えこの作法を続けている。最近学部の建物の一角でスナックレベルの食品を販売するようになったが、毎日ではなく週に3日ほどである。雨天の場合はそこ利用する。最も困るのは雨天の日であり、タイの雨天の場合は日本と異なり一時的に土砂降りでも1~2時間も続くがそのあとは晴れる。短時間であっても、土砂降りに遭遇するとずぶ濡れになり、大変な目に遭う。雨期には常に雨用具を携帯し、突然の降雨に備える準備が必要である。さらに雨が降ると停電になる。言うまでも無く、エレベーターも停止するから4階から歩いて降りなければならない。最も困るのは、コンピュータもインターネットも停止し、部屋の中は一時的に真っ暗になる。部屋にいてもいつ電気が復活するかは分からない。ではいっそのことアパートに戻ってアパートで仕事をと考えるが、部屋が暗くてはパソコンの周辺機器を含む1式を片付け、まとめることすら手間が掛かる。そのため懐中電灯も最近用意することにした。最新の注意を払ってパソコンをパックし部屋を出る。翌日来ると部屋の電気もエアコンもオンになって居る場合もある。停電時には一時的に補助電源が作動するが、電気が復活したのか、補助電源が作動したのかの判断をまちがうと上記の様な事になる。とにかく雨が降ると、決まって停電となる。予め人的に雨が降り出

すとブレーカ (Breaker) を遮断しているのかどうかは分からないが、とにかく降雨、雷、停電が

ひとつのセットになっているようである。停電になると仕事は何もできなくなるから、何を為しきたのかとその日一日を無駄にしたかのような思いにつつまれる。しかしこの状況を改善することは難しいと考えるが、何時になればよくなるのかという不安もある。と言うわけでとりあえず学部の宿舎の方への移動も一時は考えたものの、現在は当初に許可されたアパートに居座ったまま動く気は無い。やはり毎日の生活を送る以上。便利なのが優先的条件となるし、たった一人で誰も居ない宿舎で万が一急に熱が出るとか、腹痛になるとか、心臓発作など、緊急の事態へのセキュリティも考慮しておく必要がある。毎日の勤務につくには15分から30分の自転車での通勤時間が必要である。通勤途中の交通事故や犬に吠えられるなどの想定外の事故やハプニングにも備えて置く必要がある。そうした背景から一時は様子見ということで学部の新宿舎の1室を予約し、確保して貰っていたが結果としてはその宿舎へ移ることは諦め、毎日の自転車通勤を選んだ。エクササイズ (Exercise) にもなり健康にも良いし、運動による体力保持にも好都合と判断しているが、降雨と犬との出会いは未だに苦手であり、できるだけそうした機会に出くわさぬよう願っている。交通事故には細心の注意を払っているが、タイでは殆どの人がバイクや車に乗り、自転車に乗っているのは外国人か、ダイエット、健康管理を目指す人以外は、移動にエンジンが付いたバイクや自動車が一般的である。考えてみれば、必ずしも車やそうしたエンジン付きの乗り物でなくても事は足りるが、炎天下での自転車での移動は直ぐに体温が上がり汗をかく。講義や会議がある場合、直ぐにはその汗は引かない。空調の効いた部屋であってもしばしは休まないと汗は引かない。バイクや車が必要な背景が理解できる。にも関わらず、この生活を続けることに依るさらなるメリットは、毎日の通勤で道中に視ることが出来る多くの人との出会い、毎日変化する思わぬ光景に出くわすことなど、結構楽しい。さらにほぼ毎日昼食に出かける食堂の人には気心もわかり、メニューも同じものを食べているので、いつものメニューと言うことで注文も一言いっただけで注文品を分けてくれる。いわゆるお互いにわかり合えるレベルが上がっていることを感じる事ができる。買い物に入った店のいくらかには、外国人（日本人）とみるやタイ語が分からないだろうと判断して、尋ねて答えた金額を確認して払って居るのに、釣り銭の金額が違っている場合も。この場合の間違いというのは決まって売り手が儲かるような勘定になっている。たとえば、いくらかと尋ねると45バーツという返事を受けて100バーツ紙幣を出すと釣り銭は55バーツしか戻ってこない。外国人だからタイ語が分からないのでこれくらいの嘘を言っても分からないだろうと思っているようである。筆者は文句もいわず、以後そうした店には行かないようにしている。しかしタイ人の多くは親切で、人なつこく、悪い人は居ないと言うのが筆者のタイ人に対する一般的な認識である。もちろん例外もあるし、個人差もある。利害が絡むと事情が変わることも承知の上での理解、認識である。大東亜戦争で敗れたものの、それまで独立国として存在した国は日本とタイ王国であり、日

本の敗戦によりアジア、アフリカの植民国家のほぼ全てが独立を果たした。インパール作戦に参加した旧日本兵が飢えとマラリヤで苦しめ、やっとのことでタイ北部のメホンソンに辿り着き村民にお世話になった話は各所にある。筆者が通うレストランも当初は食堂という認識だけで気付かなかったが、店に置かれた物品のいくらかに、何気なく見ていたところ「一体何なのか？」と見つめ直してやっと分かった。余りにも無造作に置かれているので、特に気にも留めていなかったが、よくよく見るとそれは錆びるに任せて置いてある旧日本兵の鉄兜であった。所々に長年の錆が原因でできた小さな穴があった。経年変化が激しく、鉄兜などとは思いつかなかったが、あらためてそれが鉄兜であることを知ることになった。長い時の経過を物語る一品であり、日本が関わった歴史を想起させる一コマでもある。さらに別の方角に目をやると大きな車輪とその中央軸に「く」の字型に作った1メートル弱の木の棒が見られる。車輪は牛車のもので、日本の牛車に比べて車輪は大口径である。くの字型の木の棒は牛が牛車を引くときに首の部分に当てるヒッチ (Hitch) の役割を果たす「首木」と言う部品である。農業史や農業技術史を語るに欠かせない畜力利用の代表的なものである。気を付けないと分からないが、ちょっとその気で見るといくつもおもしろい物が目に入る。博物館に入れて置いても惜しくない品が無造作にそれとなく置かれている。農業に関わる者として興味を引かれる品々である。食堂は昼食時にほぼ満員になるほどの客が訪れる。ひとつのテーブルに8~10人が座することができるテーブルが10個ほどあり番号が付けてある。来客は昼食時(昼の12時前後から13~14時ころまで)ほぼ満席である。筆者が食するメニューは焼きめし(カオパット)で30パーツと結構ボリュームも有りうまい。だから毎度来る度に同じメニューを注文する。時にはチェンマイ大学の卒業生でマエジョ大学に教職員として就職している、かつての筆者の講義を履修した卒業生に会うこともある。相手は筆者を知っているが、こちらは「誰だったかな」と首をかしげないと分からない。時にはあなたの分も支払いを済ませて置いたと言う親切な卒業

生にも出くわす。多くの人が自分を知っていてくれると言う心強さが筆者を励まし、勇気づけ「これまでやってきて、本当に良かった」と心の底から思う。人を知り、人との良きネットワークを拡げることが人生を楽しく、残りの人生を生きる意義を教えてくれる。

「与えることの喜び」に幸せを感じることで新たな幸福に対する価値観を創る。これまで、当たり前が当たり前で無くなったときに、人は当たり前の状況にあらためて幸福を感じ、感謝する。だから当たり前の状況が当たり前で無くなる前に心の準備をしておこうと考えている。



図1 旧日本兵が使用していたと思われる鉄兜。錆びて所々に穴が開いているが無造作に木の切り株にかぶせるように置いてある。



図2 かつて用いられた牛車用の車輪と中央部にこれまた無造作に掛けてあるのは牛が牛車を引くときの首木。農業技術、農業技術史を教育する場合の教材にもなる。首木は平面的には中央部が曲げてあり、その部分が牛の首のあたりにフィットする様に曲げ筆者も幼少の頃（と言っても高校時代には未だ牛を労働力として利用していた）。と言うより、首木は予め「くの字」に曲がった木の部分を用いた物である。